

而市场经济、市场机制的优势恰恰在于它在不同文化、不同背景下的差异性和适应性。转型国家在文化上的差异性和路径上的多维性，以及面临的障碍的复杂性，为转型的经济理论的研究提供了相互比较、相互借鉴和总结概括的可能。经济学界所研究的转型问题，给予我们一个很好的试验场和相互交流的平台，用加美教授的话来讲，就是共同态度性，在我看来，或许会在这一领域获得更多的共识，在方法的一致性和多学科交叉性方面可以找到更多的交融点。从这个意义上讲，就经济学领域来说，我对共同态度性以及它的延展持有更乐观的态度。

最后，我把这两个问题加以归纳，重复一下我的结论。也就是说，从一般意义上来说，作为中国学的这样一个独立学科的建立，我们需要在时间上和空间上保持更多的耐心。就经济学而言，它可能在人文社会科学领域会超前走一步，会在共同态度性的探索中做出更多的行动，为此，我抱有更乐观的态度。谢谢大家！

●—司会 続きまして、東京大学の並木頼寿先生にお願いします。

●—並木頼寿 今、ご紹介にあずかりました並木です。現代中国学の新しいパラダイムをめぐるシンポジウムに参加させていただきました。私は歴史が専門です。中国研究における歴史的な過去の状況について、このシンポジウムをきっかけにして考えたことなどを述べさせていただきますと思います。

私は東洋史学という学科を卒業しています。ただ私は、中華人民共和国とだいたい同じぐらいの年齢の人間です。学生時代にはちょうど文化大革命というできごとがあって、大学もなかなかぎやかでした。そのようなこととも関連して、東洋史学のなかでも、中国の近代の歴史を自分の研究テーマに

することになりました。いずれにせよ、東洋史学という方法で中国の近代史の分野を勉強するということでした。

現在、私は東京大学の総合文化研究科という大学院に所属していますが、ここは地域研究、または少し特殊な用語ですが、「地域文化研究」という言葉で研究分野を表しています。歴史学が正面に出ているわけでは必ずしもありません。出身は歴史学ですが、今、仕事をしているところでは地域研究ないしは地域文化研究という看板を掲げさせられているというか、掲げることになっています。

同じく中国近代の事柄を研究するということですが、歴史学、すなわち東洋史学で考える場合と、地域研究で考える場合と、対象は中国の近代のさまざま事柄ですが、少し違いがあるのかなと思います。

こうして近代の歴史について、過去の事柄に焦点を当てていろいろと考える際にも、歴史学で考える場合と、地域研究で考える場合とでは、少し違いがある、それがどのようなところにあるのかということを考えさせられています。

東洋史学という学問領域ができたのは、ちょうど100年ぐらい前でしょうか。それ以前には必ずしも存在しなかった、日本にはなかったといってもよい。100年前に、日本で東洋史学という学問領域がつけられたときには、当時の西洋における歴史学の方法を導入することが目指されたといわれています。西洋に東洋史学があり、それが日本に来たのではなく、西洋の歴史学が日本に来て、ある事情で東洋史学ができるというかたちになるのだらうと思います。

その新しい方法を導入して東洋史学が形成されるときには、伝統的な漢学、日本に以前からあった漢学のような学問の領域の影響力

を排除して、新しい研究課題を設定して新しい成果を得ようとするところに、東洋史学という新しい学問がつくられた動機があったといわれています。このことについては、既に、いろいろな方がいろいろなかたちで指摘されている事柄です。

しかし、当然ながら東洋史学という学問は、必ずしも中国を研究対象に限るということではありません。むしろ中国の周辺地域に強い関心を注ぐという傾向が強かったように思います。

そこで逆にまた、漢学の流れをくむ学問をなさる方々は、中国を主要な研究対象とする中国学というものを、東洋史学とは少し別のかたちで、再度形成しました。当時は、「中国学」という言葉は使われずに「支那学」という言葉が使われたようです。例えば、京都大学の内藤湖南の学問などは、そうした傾向がかなり強かったのではないかと私は考えています。

これは西洋において、近代的な歴史学の形成と並行して、18世紀から19世紀に「シノロジー」、「支那学」や「中国学」でしょうか、そのようなものが形成された事情と似ているのではないかという印象を持っています。

歴史学が西洋において、アジアの研究を研究目的としたのかどうかということが、私の疑問点です。いいかえますと、近代歴史学は、ヨーロッパにおいて、はたして中国を含む非ヨーロッパ地域を研究領域に含むかたちで、そもそもつくられたものだったのでしょうか。

日本において、東洋史学が構想された場合と似たような事情が、実は西洋にもあったのではないのでしょうか。そのようなことについて、もう少し今後も考えてみたいと思っています。

ます。

そのことと関連して、少し話を最近のところに持ってきますと、中国で1980年代の民主化運動が注目され、1989年に天安門事件が発生した時期に、中国における社会変動と連動するかのようにして、アメリカの中国研究学界から「中国における歴史の発見」という問題提起がなされました。日本では「オリエンタリズム」という言葉で翻訳されたように記憶しています。元の本の名前には、「中国における歴史の発見 (Discovering history in China)」(和書名：『知の帝国主義』)という言葉が使われています。この問題提起は、その時期に日本でも中国近代の歴史について、従来の研究方法に対して問題提起がなされていたことと通じ合うような、かなり衝撃的な事柄でした。

数千年に及ぶ膨大な歴史を誇る中国に、今になってあらためて歴史を発見するということは、いったいどのようなことなのかと考えさせられました。近代歴史学が中国を研究対象に含むかたちでは形成されてこなかったことが、その裏にあったのではないかと考えられます。西洋起源の歴史学的方法を中国に適用しようとした東洋史学の試みも、「中国における歴史の発見」という問題提起とかわって、もう一度考え直さないといけないのではないかと考えさせられました。

その場合にも、研究方法そのものを中国に発見するかどうかということが、やはり鍵になるのではないかと思います。研究方法を中国に発見し得るかどうかという厄介な問題がさけられないと考えました。

地域研究の場合も、従来の研究においては、研究対象地域を研究する方法そのものを、対象地域に求めるということは、ほとんどなかったのではないかと思います。対象地

域から見れば、外在的な観点から分析がおこなわれることが避けられなかったのではないのでしょうか。そもそも地域研究は、その研究主体が所属しない地域を外在的に研究するということを使命にして成り立っていると考えれば、当たり前なのかもしれません。

ただ、このような問題は、今後、やはり何らかのかたちで再検討されなければいけないのではないのでしょうか。東洋史学の方法も、根本的に外在的な学問的方法と考えられるものを、いわゆる「東洋」(オリエント)に当てはめようとしたものだったのかもしれない。

では今後、中国または対象とする研究対象地域に、内在的な何かの方法があらためて発見されるのかどうか。中国については、それが「シノロジー」や「支那学」といわれたものと、どこかでつながったようなものになるのかどうか。または、さらにそれをもっとさかのぼって、中国の固有の伝統文化のなかであって、漢学などにつながるような何かを求めなければならないのかどうか。そのへんは、私自身もまだよくわかりませんが、対象地域に内在的に学問研究をするということ自体がどのようなことなのか。われわれが持っている方法は、ほとんど西洋から来た方法であり、そういうものを使ってやっていると思わざるを得ないと、こんなことを考えさせられています。雑駁ですが、以上で終わります。

●—司会 それでは次に、神奈川県名誉教授の小林一美先生をお願いします。

●—小林一美 小林です。私はちょうど日中戦争、盧溝橋事件や南京大虐殺といわれる事件を日本軍が起こした1937年に生まれました。そして1957年に、今は廃校になりました東京教育大学の文学部東洋史学科に入学し

ました。それから中国史を研究しながら、大学では世界史を学生に教えてきたという経歴を持つ人間です。その自分の歴史をふり返って、加々美先生の論文を読んだ感想を述べたいと思います。

まず、私が学んだ東洋史学が現代中国学と無縁な関係にあったか、またそれは何故かについて語ってみたいと思います。1957年に大学の文学部東洋史学科に入学したころ、中国近代史を学び卒業論文を書くのは、何か恥ずかしい気分でした。私は、実際は近代史、現代史を大威張りでやりたかったのですが、前近代と近現代の境目である19世紀の中国の農村社会、農民運動の研究ということでお茶を濁したわけです。なぜ、そのような恥ずかしい気持ちが起こったかと言いますと、当時の教室の雰囲気は、近代史、現代史は研究対象が流動状態にあり、またときの政治情勢、日中関係の変化などによって、研究主体の価値観と研究対象が絶えず変化していたからです。厳密な史料批判もできず、客観的な検証や価値判断ができません。したがって、評論家風の時局論に終わらざるを得ないといった雰囲気でした。

私が尊敬しておりました中国古代史の恩師は、「人民中国の歴史研究は全体的に水準が低くて、学問的には評価できない。史料の編纂事業だけは別だが」と言っておりました。このような雰囲気は当時一般的でした。その理由を考えてみますと、1つには「日本の東洋史学は世界に冠たるものであり、本家の中国に勝る」といった戦前から日本東洋史学が持っていた優越感がありました。1950年代中ごろ、京都大学の東洋史学教室におられた森正夫氏の回想記にも、東洋史の先輩方がこのような自慢話をしていた話が出てきます。

もう1つ、当時の中国の歴史学者は共産党